ハイスクールD×ディケイド

ヨヨシ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の破壊者ディケイドこと門矢　士は９つの世界を巡った後、まだ己の世界を探して旅を続けていた、とある日、光写真館の元に、門矢士を嫌っている、鳴滝が現れた、鳴滝は士に、「ディケイド、お前に頼むのは気が引けるが、ある世界が消滅するかもしれないそこでお前の力でその世界を救って欲しい」と頼まれる、士はその世界で何を観るのか？コレは破壊者が守護者となるかもしれない物語である、

コレは誰かしら思い付いたのではないかの作品であります。感想を貰えたら幸いです。

目次

破壊者　オン　ザ　レジェンド　――――――――　1
破壊者　Go　to　the　high　school　――――――　5

破壊者　オン　ザ　レジェンド

　ディケイド、それは全ての世界を破壊する破壊者、その運命を受け入れた、仮面ライダーディケイド、門矢　士、士は９つの世界を巡った後、己の世界を探して旅を続けていた、士のゆういつの居所の光写真館、そこにいるのは、士の理解者である、光　夏海、その祖父である、光　栄次郎、士の旅仲間である、仮面ライダークウガの小野寺ユウスケ、よく光写真館に顔を見せる、士の鎖縁の、仮面ライダーディエンド　海東　大樹、士はいつもの様に二眼のトイカメラで写真を撮って、現像していた、

「ダメ…ダメ…コレもダメか…ハァ、この世界も俺に撮られたがっていない」

　士は自分が撮った写真を見つめていた、どの写真もブレていたりボヤけたりしていた

「士君、またダメだったんですか？」

　その写真を覗き込む夏海

「あぁ、この世界も俺を嫌っている、ここも俺の世界じゃない」

「士が嫌われているのはいつもじゃないの？」

　笑って士をそうからかうユウスケ、

「ハッ、何を行ってるんだ？俺のカリスマ性がこの世界が妬いてるんだ」

「士君！ツボ突きますよ！」

　そう言って親指を構える

「あぁーそれ辞めろ夏ミカン！」

「まぁまぁ、落ち着きなさい、私はコレはコレで芸術的でいいと思うけどねぇ？」

「フッ、やはり爺さんだけは俺のカリスマ性をわかってくれる」

　士はそう慢心していた、

「ハァ～士君のあの性格どうにかならないのですか？」

「多分、イヤ無理だよ、夏海ちゃん」

　すると、写真館に灰色のオーロラが現れ、そこから現れたのは

「鳴滝！」
「ディケイド、貴様に頼むのは気が引けるが、お前に頼みたい事がある」
「へぇ～、お前が頼みごと？怪しさしか感じないが」
　鳴滝は一瞬額にしわを寄せるが
「お前にはある世界に行ってもらう、その世界は魔の手により崩壊しかけている！だからお前の力を貸して欲しい」
「……今度はなんの世界だ？」
　士は鳴滝の表情を見て、よほどの事だと理解した、
「ハイスクールＤ×Ｄ　と言う世界だ」
「ハイスクール？」
「Ｄ×Ｄ？」
　夏海　　ユウスケの順にそう首を傾げた、
「なんだその世界は？また仮面ライダーがいなくて戦隊がいる世界か？」
「イヤ、戦隊ヒーローもいない」
「ハァ⁉？なら怪人とかは？」
「怪人どころかショッカーすらもいない」
「ハァッ⁉？なら何がいる世界なんだ⁉？」
「その世界は、悪魔　堕天使　ドラゴン　神話　などが住む、ほとんどふつうの世界とは変わらない世界だ」
「なんだそのファンタジーな世界は？」
「悪魔とかが住む世界…」
「俺にとっての悪魔は近くにいるけどね」
　ユウスケは士を見た
「だがそのかわり渦の団《カオス・ブリケード》と言うテロ組織がある」
「ふむ、だいたいわかった」
「頼む、ディケイドいや門矢　士、その世界を救うのはお前の破壊者の力が必要なんだ！頼む！」
　鳴滝はそうゆうとなんと頭を下げた、写真館にいる皆んなはそれに驚いていた、だが士は珍しいからかカメラにそれを収めた、

「わかった、その世界が俺の世界か確かめる為にも行ってやる、ちょうど暇していたしな」
「俺も行くぞ士、ちょっとその世界に興味が湧いたしね」
「士君が行くなら私も行きます！」
　するとドアの方から銀色の蝙蝠が飛んできた
「あら～？新しい世界に行くのね？私も行くわよ～！」
「キバーラ、またお前かよ」
「いいじゃないの、私も興味があるのよ」
「まぁいい、じゃあ連れて行ってくれ、そのハイスクールｄ×ｄ　とか言う世界に！」
「！協力してくれて感謝する、ではそこにある背景を変えてくれ」
　栄次郎は背景ロールを下げた
　ビューーン！
　そんな音が聞こえた気がする、するとその背景を見た士達は、
「なんだこれは？」
「ライダー大戦に似てる？」
「なんだこの赤と白のドラゴン？」
　その背景には、空中に飛んでいる赤と白のドラゴンに、黒い烏のような翼を広げた人に、白い白鳥のような翼を広げた人、最後に蝙蝠のような翼を広げた人がドラゴンに向かっていた絵だった、
「これがハイスクールＤ×Ｄ　の世界だ、では健闘を祈っている、ディケイド」
「あぁ、その世界は任せろ、」
「感謝する、私もお前達のサポートをしに顔を出す、門矢　士、最後に言っておく」
「なんだ？」
　皆んな鳴滝が何を言うか耳を傾けていた、

「精神を強くな」
『……ハイ？』
皆んなそんな素っ頓狂な声を揃えた、
ハイスクールＤ×Ｄの世界、ディケイドはその世界で何を観るのか？ディケイドの物語はその世界で終わるのか？

始まりの旅ｅｎｄ

破壊者　Ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｈｉｇｈ　ｓｃｈｏｏｌ

　世界の転移が完了して、士達は外に出て見た。
「ここがハイスクールＤ×Ｄとかいう世界か。」
　辺りを見渡して、背景を写真に収める士
「確かに何も変わりませんね。」
「ってか士、今回のその格好って…もしかしてまた学生？」
「ハァ？…またかよ……鳴滝が言ってたのってそうゆう事かよ……ってか変わった制服だな。」
　士は自分の格好を確認した、だが今回は１つだけ違う事があった、
「いや、どうやら学校に通うのは俺だけではないようだな。」
「え？えっ⁉？私も⁉？」
「うぉ⁉？俺もだ‼？」
　二人も自分の格好を確かめた、夏海とユウスケも制服を着ていた。
士は相変わらず二人の格好を写真に収めていた。
「どうやら今回の旅は長旅になりそうだな…」
　士は小さくそう呟いた
「？士君、今何かいった？」
「いや、また俺の格好が俺に馴染んでるなって思っただけだ」
「あ～、ハイハイ」
　夏海は呆れていた、士は胸ポケットから学生書を取り出して。
「どうやら駒王学園って高校が、俺達の通う学校らしい」
「駒王学園？」
「あぁ、しかもその高校は元々は女子校らしい、それがつい最近男子と女子の共用高校になったらしいな…アホな男にとっては楽園だな……」
「マジかよ、居づらいよその高校…大丈夫かなぁ…」
「というか士君は何処にあるか分かるの？」
「あぁ、大体分かった」

「大体じゃ無くて…ハァ～」
夏海は半端諦め掛けた、士のこの性格はどうにもならないと
「そんな事より、お前らは行かないのか？転校初日から遅刻は嫌だろ？」
「あっ！おい士！その駒王学園って何処にあるんだよ？」
「こっちだ、付いて来い」
士達は駒王学園に向かった、

オッス！俺は兵藤一誠だ！この駒王学園の２年だ！それにしても今日は転校生が来るらしいな、美人な人がいいなぁ～ぐへへへへ～、おっ？俺の大親友の（悪友達）元浜と松田が来た
「なぁなぁ聞いたか！イッセー？」
「聞いたかイッセー？」

「聞いた聞いた！転校生だろ？」
「あぁ！しかも一人ではなく３人も来るんだぜ！どんな美人が来るんだろうな？」
「３人とも女かな？あっ！だがイケメンは受付ねぇ‼？」
「（ΩΩΩ）なんだって⁉？それは大変だ‼？……ってそうじゃなくて、俺はいいオッパイの女の子がいいなぁ～ぐへへへへ」
　その会話を近くで聞いていた女子はその３人から離れて行った。
すると担任が入って来た。
「はい、席に着いて、ホームルームを始めるぞ」
「先生！今日転校生が来るんだろ？」
「美人ですか？美少女ですか？」
「選択肢１つだけじゃねぇか……自分で確かめな、それじゃあ入って来い」
　するとドアが開き、３人転校生が入って来た、女子達はその転校生の事を話し、一部の男子は男子の転校生を睨んだ。それもそのはず、一人の男子は百人中百人の人がモデルの様に思うクールな印象の男で、もう一人が人懐っこい印象が女子の心をくすぐる笑顔で笑っている男だからだ、睨まれていると認識した士は何食わぬ顔で鼻で笑った、
「今日来た３人がこのクラスに入る転校生だ、自己紹介してくれ、」
「はい、光　夏海です。この学園に転入して分からない事があると思いますが、皆さんと仲良くなりたいと思います。」
「俺の名前は小野寺　ユウスケ！好きな事はバイクに乗る事！皆んなよろしくな‼？」
　そう言って笑顔でサムズアップするユウスケ、女子の中でユウスケの笑顔で母性をくすぐられたとか、
「俺は門矢　士だ、趣味は写真を撮る事、得意な事は全てだ」
　士の紹介によって、女子達の好感度が一気に上がった反面男子の好感度が一気に下がったとか、
「士君のあの俺様感かっこよくない？」
「趣味が写真で全て出来るってカッコいい！」

「私はユウスケ君かな？あの笑顔が私の母性をくすぐるのよ！」
「わかるそれ！」
「夏海ちゃんモデルみたいに綺麗～羨ましいなぁ～」
　一方男子は
「クソォォォォ‼？やっぱりイケメンかよ‼？」
「しかもなんだよアイツの俺様キャラ⁉？」
「それにアイツのあざとい笑顔はなんダァ⁉？」
　愚痴りまくっていた。すると一人の女子の誰かが
「今度土君に写真撮って欲しいなぁ」
　すると土はそれを聞き逃さなかったのか、
「フッ、任せろ、お前の全てを撮ってやる」
　更に女子達は
『キャーーーーー！』
　そう黄色い声を上げた
「いいなぁ！私も撮って！」
「私も！」
　土はそれを聞き、慢心していた。一気に男子達に睨まれているのに、あたかも風の様に受け流していた、
「もう！土君！やめてください直ぐ調子に乗るのは！」
　夏海は頬を膨らませて怒った、
「夏海ちゃん、さっきも言ったけどコイツのこの性格はどうにもならないよ」
　ため息を吐きながら呆れているユウスケ
「えっ？3人とも知り合いなの？」
　クラスの誰かがそう聞いた
「まっ、腐れ縁ってやつだ」
　土がそう答えた、
「チクショー！夏海ちゃんと知り合いかよお前ら‼？」
　血涙を流すイッセー達
「なぁ、何であの3人は血涙流してるんだ？」
「あ―気にしないで土君、それとあの3人には関わらない方がいいよ。

特に夏海ちゃんは」
「えっ？私？」
「うん、あの３人はこの学園の変態三人衆で有名だから…」
「だから夏海ちゃんが狙われるかもしれないから」
「さっきもあの茶髪の一誠は夏海ちゃんの身体を舐め回して観ていたし」
　夏海はそれを聞き、自分の身体を抱えた。士はそれを聞いて
「ほぉ、夏海に手を出そうとするなんて返り討ちになると思うが、仮にそんな事をする奴は俺が許さないけどな。」
　士の何気ないその一言で女子はまた黄色い声を上げた、
「キャァァァァー士君カッコいい‼？」
「俺が許さないって胸がキュンキュンしちゃう！」
「コレは夏コミの原稿が描けるわ‼？」
「今日放課後部室に即集合よ！」
　騒いでいると先生が痺れを切らしたのか
「話が進まん‼？静かにせんか‼？じゃあ３人は後ろの席に座ってね」
　取り敢えずホームルームは無事に？終わったのであった